

コンベンション・健康づくりによる八王子市の活性化

先行事例から学ぶ

金指 征治

はじめに

最近、地方（地域）都市に活気がないと言われている。理想的な地域づくり（まちづくり）には、健康づくりで住民個人の活性化と人を呼び込むことによる地域自体の活性化を図り、地域の総合的活性化を実現することが希求される（図表1・2）。

複雑多様化の現代社会の大きな特徴として、ハイタッチ（フェイス・ツー・フェイス）コミュニケーションの欠如が指摘されている。通信技術の発達した現在でも人が直接接することが重要で、そのためにコンベンション（会議、集会、展示会等）が注目される。「人と自然との共生」（八王子市のまちづくり基本理念にも示されている）が言われている中で、都市部から個性豊かで変化に富む地域での開催に移行する傾向が見られる。

もう一方の特徴は万病の元、生活習慣病（成人病）の根幹をなすストレスの増加で、それは薬で治ることは少なく、その解消には日常生活から脱し自然豊かな地域で半健康状態から早期に脱することが求められる。住民個人の健康維持増進ばかりでなく、それを目的とする人々を地域外から呼び込むことも可能である。

最近、欧米の地域（リゾート）では、上記の「コンベンションと健康」を新規に組みあわせる傾向が多く見られ実績をあげている。大都市と異なり、オープンな気持で、より良い交流が行われ、時代にマッチした健康や美容施設・設備が付加されて、更に魅力が感じられる。これらは大都市では考えられないことである。今後の地域経営には、その活性化の起爆剤とするため人を呼び込み、ヒト・モノ・カネ・情報を取り入れ、集積し、活用することが重要である。

大都市に隣接する八王子市の特徴（オンリーワン）を十分活かせる「自然」と、企業・学校・病院をベースとした「学術・芸術・科学・ハイテク医療技術」等を背景に、産学官連携で八王子市の知名度高揚に結びつけ、市の活性化のため市内に人を誘致することが重要と思われる。

1. コンベンション誘致による地域活性化

コンベンション開催は、その地域の成長性、独自性、信頼性、国際性、威厳性等を誇示する最大の武器であり、今後の社会的ニーズを先取りするもので、開催地とその周辺地域に直接・間接にどれだけの経済的寄与や波及効果を及ぼすかで評価される。八王子市の第一の特徴である「ハイテク技術と豊富な自然」のイメージを活かしたコンベンション開催による市内の活性化手法を以下により考察してみたい。重要なことは、宿泊と飲食に一番消費額が期待されるので、参加者に市内に宿泊滞在させるための知恵を絞ることである。

（1）コンベンションとは

「コンベンション」とは、「人の集まりを背景に情報交換を行い、共通の認識を持ち、ビジネス局面を展開」することである。本来は宗教・政治政党集会を指したが、今では米国の大統領候補選出の会合やトレードショーが代表的なものとして良く知られており、日本でも最近この言葉が多く使用されるようになった。広く会議、見本市、展示会、博覧会やその他催事・イベントの開催を意味し、人の集まりにより開催地域に多大な物質的、精神的な影響と経済波及効果を与えるばかりでなく、文化・社会・教育振興にも寄与する。

(2) コンベンションの生い立ち

近代的意味での本格的国際会議(後にコンベンションと呼ぶ)が1814年にウィーンで開催され、コンベンション発祥の地とされている。日本で公式にコンベンションという言葉が登場したのは、1964年の東京オリンピック開催以降である。

旧運輸省の諮問機関である観光産業連絡会議は、1986年8月、「21世紀のコンベンション戦略」というタイトルで、欧米より10年以上遅れていたコンベンションの報告書をまとめ、これを契機として広く普及させた。1995年には、「日本コンGRESS・コンベンション・ビューロー」が設立され、会議情報や誘致ノウハウを開催希望地区に提供し、日本の経済力に見合ったコンベンション開催国・先進国を目指してきた。

(3) コンベンションビジネス(産業)

コンベンションとは人が集まることであり、そのビジネスとは、その地域にいかにして人を集め、地域の活性化とまちづくりを促進させ、官民一体で、C I (Community Identity) を創出していくかというシステム産業と言える。

欧米では1970年代頃から注目され始め、特に、米国では、ベトナム戦争を契機に荒廃しかかった都市が、コンベンション開催によって復活した。コンベンション産業は一般観光業に比べ伸張率が急速で、1980年以降は年率二桁の確実な成長であった。現在も開催地と周辺地域に及ぼす経済的インパクトも多大で、これらの誘致に躍起となっている。ビジネスとして盛んな理由は、誘致組織・団体が強力なパワーを持っており、訪問客から徴収した宿泊税を誘致組織に充当し、会員からの会費も活動費に付加され、地域住民には負担がなく、コンベンションの誘致活動が可能だからである。

(4) コンベンション開催波及効果

コンベンション成長率トップの米国の平均像は、産業として捉えられ始めた今から30年以上前から、一般観光客と比べると消費額はかなり高かった。ラスベガス市(注1)では1996年の一人当たりの平均消費額で、コンベンション参加者が927ドル(内トレードショー参加者が1,461ドル)、一般観光客が505ドルであった。ビジネスとして始動し始めた1974年から10年間、観光収入の伸びが3倍であったのに対し、コンベンション収入は8倍とはるかに大きく、また1987年から10年間は前者が2倍、後者は3.3倍であった(注2)。消費単価が大きいと、地域に与える影響も多大であった。米国の他の主要大都市も地方都市もほぼ同様な傾向になっていた。またコンベンション参加者は社会的な地位の高い人や影響力の大きい人が多く、開催地に及ぼす影響は観光客よりはるかに大きい。繰り返し開催され、開催期間が長期なほど、波及効果は大きくなる。

(5) 八王子市内での具体的「開催誘致」

八王子市内でコンベンションを開催させる際、最大の特徴を活かすには、第一に、自然に直接接する施設を提供することである。夕やけ小やけふれあいの里、高尾の森わくわくビレッジ、八王子セミナーハウス、或いは市域の中でも至近距離に自然が見渡せる施設でのコンベンション誘致が有効である。また、当日前後の行事として、施設内外で諸々の趣味活動や健康行動を実施するのも非常に重要であろう。

第二に、国籍を問わず誰でも気楽に参加できる大学のキャンパス(夏冬年度末の授業休講時は寄宿舎を宿泊施設として)を利用した誘致である。多数の大学がある八王子市内にはバラエティに富んだ部科が設置されているので開催の幅が広い。国内外の学会に参加する教職員に八王子市内の大学での開催誘致を依頼する。将来、八王子市を宣伝してくれる宝となる多数の学生にも参加を呼びかける。東京都心まで至近距離のうえに公共交通が便利であり、参加者はどこに出かけていても何時でも八王子市内の宿舎に帰着可能である。高物価の大都市域に宿泊する必要がなく、

自然豊かな宿泊施設に滞在できることは、参加者にとって魅力的である。

第三に、大都市で開催中のコンベンションの分科会（或いは関係部会）を八王子市に誘致することも得策である。環境に関するものであれば尚更であり、今後環境問題は避けて通れない課題なので、環境に関する会合はすべて「八王子市で」と宣伝することも効果的である。更に、大病院を背景としたハイテク医療関連やハイテク企業技術に関するコンベンション開催も、八王子市のイメージには大変相応しい。

第四に、八王子市はイメージ的に学術関係の会議が適しているので、文部科学省の学術関係部署、日本学術会議や日本学術振興会等に、当地が最適であることを積極的にアピールする。日本にあるコンベンションの本部・支部や事務局にも働きかける。次回の開催地を決定する会議には関係者を派遣して誘致運動を展開する。

第五に、市内で開催するコンベンションの主催者・参加者に何らかの便宜を図ったり、寄付金免税措置を関係先に働きかけたりすることも、他地域に先がけ誘致を有利に進める方策である。政府も2008年中の観光庁設置を目指す等、観光政策に本腰を入れたので、今後諸外国からの参加者も着実に増加することが期待される。

八王子市でのコンベンション開催は、新規に施設を建設する必要はなく、現在の施設をそのまま利用すれば足り（但し最小限の手直しが必要の場合もある）誘致努力と開催ノウハウを駆使するだけで即実現可能である。コンベンション開催は一般観光と異なりシーズンにあまりこだわらないので、宿泊・飲食その他関連施設の稼働率上昇にも繋がり、シーズン平準化にも寄与する。特に八王子市の冬は空気が澄んで眺望も良く、自然を享受するのに適している。

最後に非常に重要なことは、一般観光施設のハード面・ソフト面の充実である。なぜなら、参加者はプレとアフター・コンベンションの行事を楽しみの一つとして集まるからである。

2. 健康づくりによる地域活性化

八王子市のもう一方の特徴である自然を活用した健康づくりによる個人の活性化と市内に人を呼び込む手法について述べてみたい。保養行動による健康促進効果は、医学的、生気象学的、運動生理学的見地からも科学的に解明されるようになった。動物の声、風・滝・川・木々の葉ずれ音、その他身体で感ずる自然界の変化等は人間の五感を通じて自律神経を刺激し、ストレス解消作用があるとされている。

（1）健康づくり（健康増進）とは

本格的な病気に陥らないように健康づくりで個人が元気（活性化）を維持することが重要である。医学博士で、日本温泉療法医会の顧問でもある植田理彦氏は「保養地はストレスを解消するのに最適地で（中略）日常生活から離れ（中略）自然環境にふれながら保養することは、生理的・心理的な種々の効用が認められる」としている。また保養の最先進国ドイツに、「保養の1マルクは病気の3マルク」という諺がある。保養地での病気予防のために金を惜しむと治療にそれ以上の出費がかさむという意味であるが、双方とも保養地（リゾート）での健康づくりは病気の第一次予防上非常に重要であることを示唆している。

（2）保養地での健康づくり

樹林帯の樹木から発散する芳しい香りの揮発性物質が人間に生気をもたらす。旧ソ連の生態学者トーキン博士はこれをフィトン（植物）チッド（殺す）と呼び、医学の始祖古代ギリシャのヒポクラテスは、「人間は病気になっても、健康回復を促す力を持っている（中略）それには水、空気、大地の自然が大切な要素である」と説いた。人間に潜在する治癒力を投薬に頼らないで引き出すことが重要で、非日常性の特色を演出できる自然環境のある地域で人間性の回復を図ることが大切である。

(3) 健康づくりの有効性

生活習慣病の防止には日常生活の改善が必要である。そのための総合的健康づくり行動として「保養プログラム」を実践することで、日常生活習慣の改善が期待できる。なお、その有効性を実証した例が既にある(図表3・4)。成人病のリスクファクターを有し、生活習慣改善の必要ありとされた中高年対象者を保養地に3～6日滞在させ、健康の3要素(栄養・運動・休養)をバランスよく取り組んだ保養プログラムを実施する。成人病予備軍を日常の職場や家庭生活から離し、保養地での非日常空間で、専門的なスタッフにより健康についての「気付きの機会」を与え、具体的に健康づくりを指導する。一般の運動処方他に、趣味活動も採用し、保養地での生活を楽しく効果的に過ごすために、周囲の森林等の自然環境や保養食等地域特性を活かした諸々の要素を同プログラムに取り入れている。

(4) 八王子市内での具体的「健康づくり」

健康づくり行動は日常生活(ケ)では浸れない自然環境の中で、非日常(ハレ)行動をするため、いつでも気楽に訪れることができる場所が望まれる。首都圏と至近距離にある八王子市は理想的な位置にあり、「夕やけ小やけふれあいの里」は良好な候補地となる。上述の「保養プログラム」の実践に必要な施設や設備がほぼ揃っている。例えば森林浴コースは長短、緩急バラエティに富んでいるので、参加者の年齢、性別、症状や体力に応じたルートが選定可能で、落葉樹林と常緑樹林等も混在して変化に富んでいる。また多様な趣味の活動ができる設備と環境が整っているので理想的な場所と言える。具体的に実践する際は事前に専門スタッフに調査してもらうことは必要だが、一部不足する設備は付近の施設を利用することも可能である。

同プログラム実施に当たっては複数日の滞在を要するので、宿泊施設(おおりの家) 飲食施設(いろりばた)や、その他関連施設の利用効率を上げることが可能になる。企業や健康保険組合にプログラム実施を勧めれば、平日が主体となるので、現在週末に偏重している施設利用を平準化することもできよう。一般的に言われる保養地・リゾート地に比し、八王子市は大都市と至近距離に位置するため企業・健保組合(個人参加も同様)が負担する費用は少額で済むので、その分多数の人が参加できる可能性がある。高尾の森わくわくビレッジや、八王子セミナーハウスも有力な候補施設と言えよう。

当初は市の関係者にモデルプランを実践してもらい、その効果と有効性を市民に公表することから始め、徐々に他の行政や企業に広げ宣伝していくことが理想的なことと思われる。市民個人が健康を維持することにより、明るい個人生活と快適な地域社会を構築でき、医療費の削減にも繋がり、それを実践する人々を市外から呼び入れることも可能である。

おわりに

「コンベンションと健康」のキーワードを基に、実例をあげながら八王子市の活性化手法を考察した。雇用促進効果、社会的・文化的効果、知名度高揚効果、産業振興等地域波及効果が多大であることから、人を集める方策として、行政を中心に推進されるのが効果的と思える。

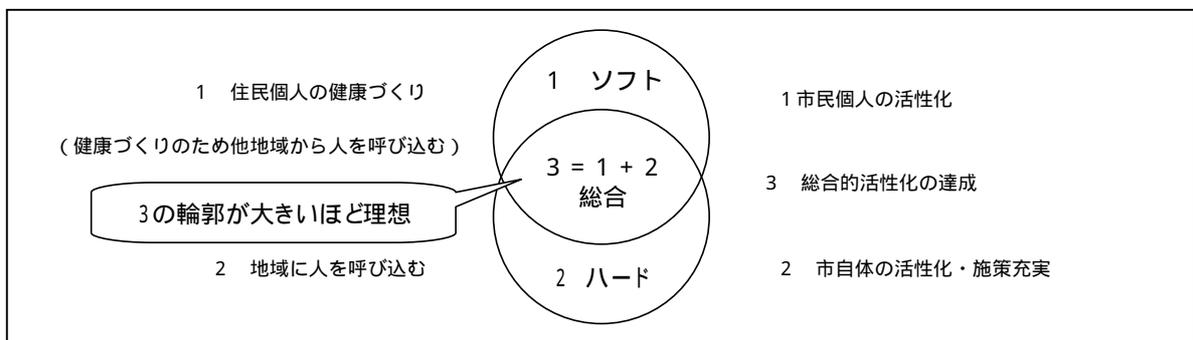
主要国首脳会議(サミット)は日本だけが沖縄を除き過去3回とも大都市東京で開催されたが、他の国は地域都市(または保養・リゾート地)でも開催された。超多忙な元首が集まる会議でも非日常空間で開催されたことから、今後とも多様な会合が保養地で開催される傾向は続くと思われる。2008年サミットが洞爺湖畔で開催されるのは大きな意味がある。日常生活から回避を求め、場所を換えることによる転地効果を狙うため、今後、多くの人が保養・休養地で滞在することが慣例になると思われる。

八王子市訪問により、一般観光(見る、食べる、遊ぶ、サービス享受等)だけでなく、訪問客の生活向上(QOL)に貢献できる「何か」を感じ取って自宅へ帰着させる、その「何か」が「健

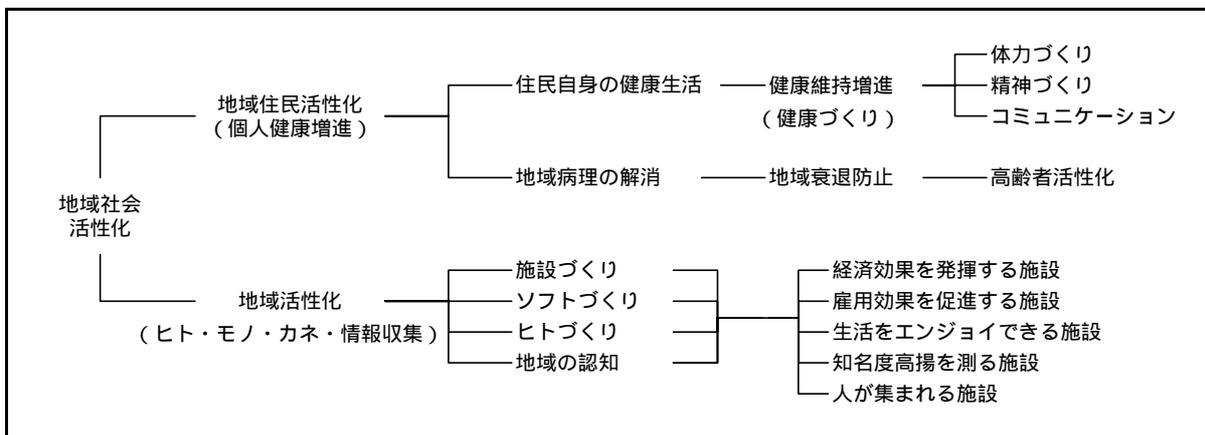
康」である。八王子市の地域特性「自然、学術、大学、ハイテク企業・医療等」の特異な資源を活用し、市全体を東京近郊「保養都市」に仕立てることである。東京 23 区とその近郊には大規模コンベンション施設を所有した大都市が多数あり、熾烈な誘致合戦が展開されている。これら大都市では見られない自然要素を所有した八王子市を、小規模だがパンチの利いた「コンベンション保養・リゾート都市」とし、良質なコンベンション誘致と健康づくりの場を提供することで、より多くの滞在客を呼び込むことが可能である（図表 5）。

実施に当たって、「コンベンションと健康」の二つの要素を同時に併用することも、それぞれ個別に実行することも勿論可能。これからの八王子市にとって、このキーワードを従来の要素に組み入れ、保養とドッキングさせるシステム構築により地域振興の起爆剤とすることは、市の更なる発展と地域経営戦略上必要と思われる。

図表 1 まちづくりの基本構成



図表 2 地域社会の活性化

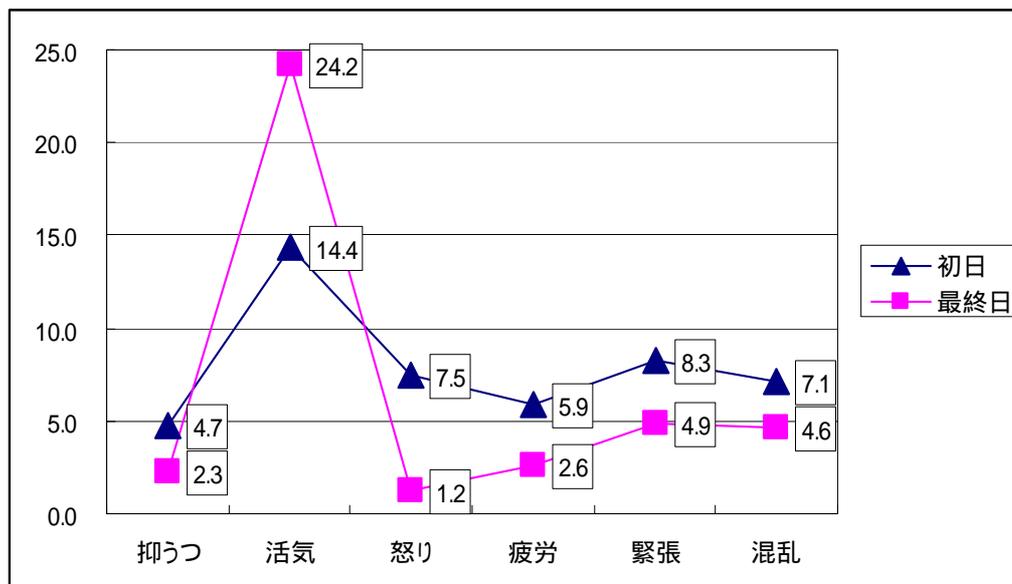


図表3 保養プログラム参加による生理的効果

項目	性別	セミナー初日	セミナー最終日	変化値
収縮期血圧 (mmHg)	男	142.6 (±17.9)	132.5 (±16.1)	-10.1 (±1.2)
	女	129.7 (±16.6)	119.6 (±15.5)	-10.1 (±14.2)
	全体	138.4 (±17.8)	128.3 (±16.9)	-10.1 (±12.8)
拡張期血圧 (mmHg)	男	95.3 (±13.4)	88.0 (±12.5)	-7.3 (±8.7)
	女	85.1 (±11.5)	77.5 (±9.9)	-7.6 (±9.2)
	全体	92.0 (±13.7)	84.6 (±12.7)	-7.4 (±8.8)
中性脂肪 (mg/dl)	男	201.2 (±183.5)	109.5 (±77.5)	-91.7 (±128.5)
	女	86.4 (±42.2)	57.1 (±17.6)	-29.3 (±36.9)
	全体	163.9 (±161.5)	92.5 (±68.8)	-71.4 (±111.2)
総コレステロール (mg/dl)	男	216.7 (±37.7)	213.9 (±32.1)	-2.8 (±16.6)
	女	212.4 (±44.2)	211.5 (±41.2)	-0.9 (±13.0)
	全体	215.3 (±39.5)	213.1 (±34.9)	-2.2 (±15.4)
空腹時血糖値 (mg/dl)	男	116.8 (±35.7)	102.0 (±27.0)	-14.8 (±19.5)
	女	106.7 (±27.7)	92.5 (±22.1)	-14.2 (±19.5)
	全体	113.5 (±33.7)	98.9 (±25.9)	-14.6 (±19.5)
尿酸値 (mg/dl)	男	6.2 (±1.3)	6.8 (±1.4)	0.6 (±0.9)
	女	4.2 (±0.9)	4.7 (±0.9)	0.5 (±0.6)
	全体	5.6 (±1.5)	6.1 (±1.6)	0.5 (±0.8)

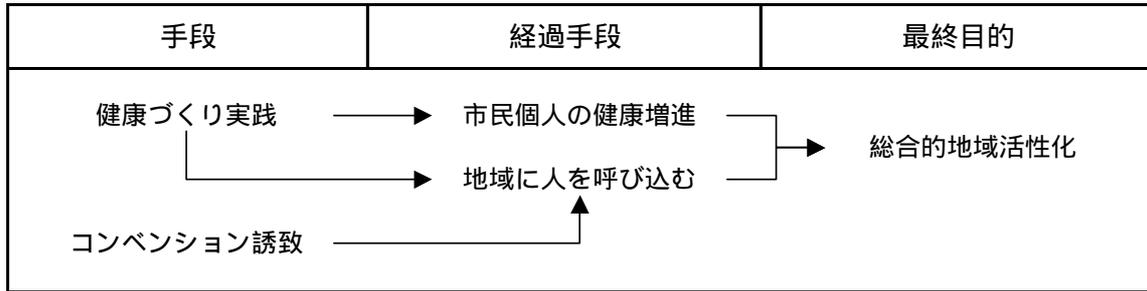
出所：「健康づくりセミナー開催のお勧め」より（2005.11（財）日本健康開発財団作成資料）

図表4 保養プログラム参加による心理的効果



出所：「健康づくりセミナー開催のお勧め」より（2005.11（財）日本健康開発財団作成資料）

図表5 八王子市の更なる活性化手法のイメージ



注

- 1) 1970年の人口はわずか12万人、1995年には36万人であるが、現在は200万人を越えている。
- 2) 1995年9月、Las Vegas Convention BureauのMr.K.Bagger氏から、統計的なことも含めて、直接聞き取り調査を行った。

参考文献

- ・阿岸祐幸『森林浴と健康』、(財)保健会館、1995年
- ・岩崎輝雄『楽しむ森林浴』、ノラブックス、1984年
- ・植田理彦『どっぷり自然浴 山・森・海を利用してストレスを断つ』、国際地学協会、1985年
- ・金指征治『コンベンションによる地域インパクト』、個人書店、2002年
- ・金指征治『地球温泉めぐり』、個人書店、2002年
- ・国土交通省『観光白書』(平成16～19年版)
- ・田部井正次郎『コンベンション』、サイマル出版会、1997年
- ・日経産業新聞編『コンベンション・ビジネス イベント一切承ります』、日経産業新聞、1988年
- ・平野繁臣『イベント国富論』、東急エージェンシー、1987年
- ・堀貞一郎『人を集める なぜ東京ディズニーランドが“はやる”のか』、ティビーエス・ブリタニカ、1987年

(かなざし せいじ・八王子市七国四丁目在住)